

京都大学	博士（ 医学 ）	氏 名	Patou Masika Musumari
論文題目	A mixed method study on the correlates of patient adherence to antiretroviral therapy in the Democratic Republic of Congo: implication of food insecurity (コンゴ民主共和国において、患者の抗 HIV 治療アドヒアランスに関連する要因に関するミクストメソッド研究：食糧飢餓の意義について)		
(論文内容の要旨)			
世界的なエイズ対策の進展により、途上国の多くの HIV 感染者が抗 HIV 治療（ART）を受けられるようになり、サハラ以南アフリカでも、HIV 感染者の予後は大きく改善した。しかし、耐性ウイルスの発生防止には、高い服薬アドヒアランスが求められるため、ART プログラムの持続性を保つには、服薬アドヒアランスに影響する要因の分析とそのコントロールが不可欠である。しかし、コンゴ民主共和国では、そうした要因の検討は行われていなかった。 本研究は、第一相の質的研究と、第二相の量的研究から構成されるミクストメソッド（mixed method）により、コンゴ民主共和国の首都キンシャサにおいて、ART の阻害要因、促進要因の分析を試みた研究である。 第一相の質的研究では、アドヒアランス経歴の異なる、治療継続者（n=19）、治療中断経験者（n=13）、治療脱落者（n=6）の 3 群の対象者に対して半構造化面接を行い、逐語録のテーマ分析によって、食糧飢餓（food insecurity）が全群に共通した最も重要な服薬アドヒアランスの阻害要因であること、それ以外に、経済的、宗教的要因、差別偏見、失念（forgetfulness）なども関係していることを明らかにした。 これらの結果に基づいて、第二相の量的研究のための質問票を作成し、4 つの医療機関から連続サンプリングした 898 人の HIV 感染者を対象に、食糧飢餓及びその他の要因と ART 服薬アドヒアランスとの関連を横断研究によって検討した。その結果、512 人（57%）の患者が食糧飢餓状態にあること、188 人（20.9%） が低服薬アドヒアランス状態（服薬率<95%）にあることが示された。そして、食糧飢餓（Household Food Insecurity Access Scale で測定）が、低服薬アドヒアランスと統計学的に有意に関連すること（調整オッズ比[AOR]2.06; CI, 1.38-3.09）、ART に有害作用があるとの認識、心理的抑うつ状態が、それぞれ低服薬アドヒアランス（AOR, 1.95; CI, 1.15-3.32）と高服薬アドヒアランス（AOR, 0.31; CI, 0.11-0.83）に関連することを明らかにした。 以上、ミクストメソッドにより、コンゴ民主共和国の首都キンシャサの HIV 感染者において、食糧飢餓の頻度が高く、かつ食糧飢餓が、ART 服薬アドヒアランスの重要な阻害要因である可能性が示された。これらの研究結果は、ART の服薬アドヒアランスを高めるため、ひいては、サハラ以南アフリカにおける ART プログラムの持続性を保証するためには、ART プログラムと食糧支援対策が統合的に実施されることが必要であることを示唆するものである。			

次に、この結果に基づいて作成した質問票を用いて、4 施設から連続サンプリングした 898 人の HIV 感染症患者を対象に横断的量的研究が行われ、その結果、57%が食糧飢餓状態にあること、21%が服薬遵守率 95%未満であること、多変量解析により、食糧飢餓が非服薬遵守の最大の関連要因であることが示された。 （論文審査の結果の要旨） 世界的なエイズ対策の進展により、途上国の多くの HIV 感染者が抗 HIV 治療(ART)を受けられるようになり、サハラ以南アフリカでも、HIV 感染者の予後は大きく改善した。しかし、耐性ウイルスの発生防止には、高い服薬アドヒアランス（服薬遵守）が求められるため、ART プログラムの持続性を保つには、服薬遵守に影響する要因の分析とそのコントロールが不可欠である。しかし、コンゴ民主共和国では、そうした要因の検討は行われていなかった。本研究は、ミクストメソッド研究により、そうした要因の分析を試みた研究である。 質的研究では、治療継続者(n=19)、中断経験者(n=13)、脱落者(n=6)に対して半構造化面接を行い、テーマ分析によって、食糧飢餓が共通した最も重要な服薬遵守阻害要因であること、経済的、宗教的要因、差別偏見なども関係していることが示された。次に、この結果に基づいて作成した質問票を用いて、4 施設から連続サンプリングした 898 人の HIV 感染症患者を対象に横断的量的研究が行われ、その結果、57%が食糧飢餓状態にあること、21%が服薬遵守率 95%未満であること、多変量解析により、食糧飢餓が非服薬遵守の最大の関連要因であることが示された。 以上、本研究は、食糧飢餓が非服薬遵守の重要な要因であることを解明し世界的エイズ対策に新たな視点（食糧支援との統合の必要性）の必要性を示唆した有意義な研究である。 したがって、本論文は博士（医学）の学位論文として価値あるものと認める。 なお、本学位授与申請者は、平成 26 年 2 月 21 日実施の論文内容とそれに関連した試問を受け、合格と認められたものである。
